

今週の為替相場見通し(2021年2月22日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		104.92 ~ 106.22	105.44	104.80 ~ 106.50
ユーロ	(ドル)		1.2024 ~ 1.2169	1.2118	1.2000 ~ 1.2200
(1ユーロ=)	(円)		126.75 ~ 128.45	127.77	126.00 ~ 128.50
英ポンド	(ドル)		1.3830 ~ 1.4036	1.4001	1.3850 ~ 1.4150
(1英ポンド=)	(円)	*	145.33 ~ 148.16	147.75	147.00 ~ 150.50
豪ドル	(ドル)		0.7725 ~ 0.7877	0.7868	0.7720 ~ 0.7920
(1豪ドル=)	(円)	*	81.41 ~ 83.16	82.98	81.80 ~ 84.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 104.80 ~ 106.50 円

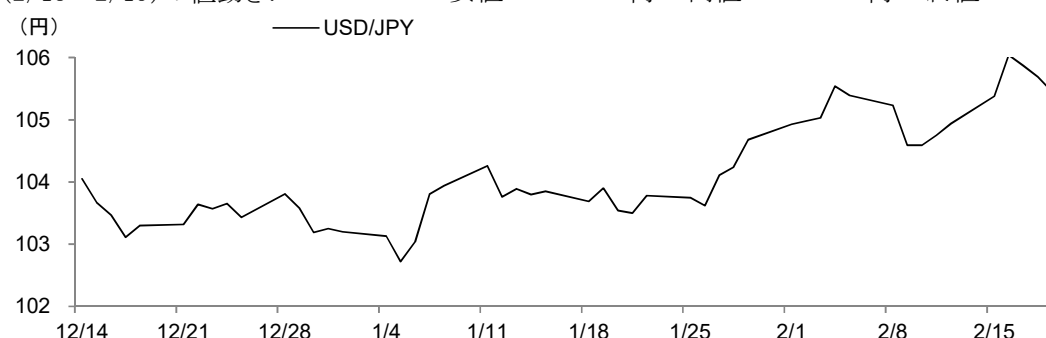
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は約半年ぶりの高値をつける展開。週初15日、105円台前半でオープンしたドル/円は、直後に一時週安値となる104.92円をつけるも、日経平均株価が30年ぶりに3万円台に乗せる動きにリスクオンの円売り地合いが強まり105円台前半までじりじりと上昇。翌16日には、米2月ニューヨーク連銀製造業景気指数の良好な結果や米金利の上昇もあいまって、ドル/円は106円台前半まで上値を伸ばした。17日には、ドル/円は、一時年初来高値となる106.22円をつけたが、その後は実需の円売りやアジア株の軟調推移を背景に105円台後半まで下落。海外時間に、米1月消費者物価指数(PPI)や米1月小売売上高の良好な結果に、再度週高値近辺まで上昇したが、米金利の反落などを受けて、ドル/円は、105円台後半まで押し戻された。18日は、対欧州通貨でのドル売りや米経済指標の強弱入り混じる結果に、ドル/円は105円台後半を推移した。その後は米10年債利回りが1.3%を割り込むなど金利上昇の動きも一服する中、上値の重い展開となった。19日は良好な欧州指標の結果を受けて、対ドルで欧州通貨が買われる動きにドル/円は105円台半ばまで軟化。200日移動平均を下回ると、ストップロス巻き込み105円台前半まで下値を広げた。終盤にかけては米金利の上昇から小幅に値を戻すも、上値は重く結局105円台半ばで越週している。

今週のドル/円は小確りとした展開を予想する。バイデン米大統領が掲げる1.9兆円規模の追加経済対策について、民主党上院トップのシュマー院内総務は19日に「3月14日までに可決を目指す」と発言。足元、法案可決への期待感から、米債利回りは10年債、30年債共に約1年ぶりの水準まで上昇、米株も高値圏での推移が続くなど、リスクオフの地合いとなっている。一部の民主党上院議員が最低賃金の引上げ案に反対するなど、不透明感が残存するが、喫緊でそのリスクが顕在化する蓋然性は限定的だと考えている。ドル/円に関しては、経済対策への期待感やマーケットの楽観的な見方もあり、リスクオフの巻き戻しの動きが広がる展開は想定しにくい。200日移動平均の水準を、再度試す展開になるのではないかと。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/15~2/19)の値動き: 安値 104.92 円 高値 106.22 円 終値 105.44 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 1.2000 ~ 1.2200 126.00 ~ 128.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は下に往って来いの展開となった。週初15日は1.2120でオープン。米国休日で積極的な取引が行われない中、動意を欠く値動きとなり、オープンと同水準の値でクローズ。16日は独2月ZEW景気期待指数が前月比大幅に上昇したことに加え、ユーロ圏第4四半期GDPが予想以上に改善したことからユーロ買いが強まり、一時週高値となる1.2169まで上昇。しかしその後、米金利の上昇に伴うドル買いによりユーロ売り圧力が強まり1.20台後半まで反落し、結局1.21台前半でクローズ。17日は前日からの流れを引き継ぎ、米長期金利が約1年ぶりの水準を記録する中、引き続きドル買い優勢。米1月PPIや米小売売上高が予想比良好な結果となると、更にドル買いが進み、一時週間安値となる1.2024まで下落し、1.20台前半でクローズ。18日は米金利の上昇が一服し、ややドル売りが優勢。ECB政策理事会の議事要旨への反応は限定的となったが、英中銀のマイナス金利導入の思惑が後退していることを背景とした強いポンド買いにもサポートされ、じりじりと上昇。一時1.21台手前まで上昇し、1.20台後半でクローズ。19日はユーロ圏2月製造業PMIが予想を上回る結果となり、対ドルでのユーロ買いが優勢。一時1.21台半ばまで上昇するが、米金利の上昇が重しとなりそれ以上の上値を迫る展開とはならず。1.2118で越週した。

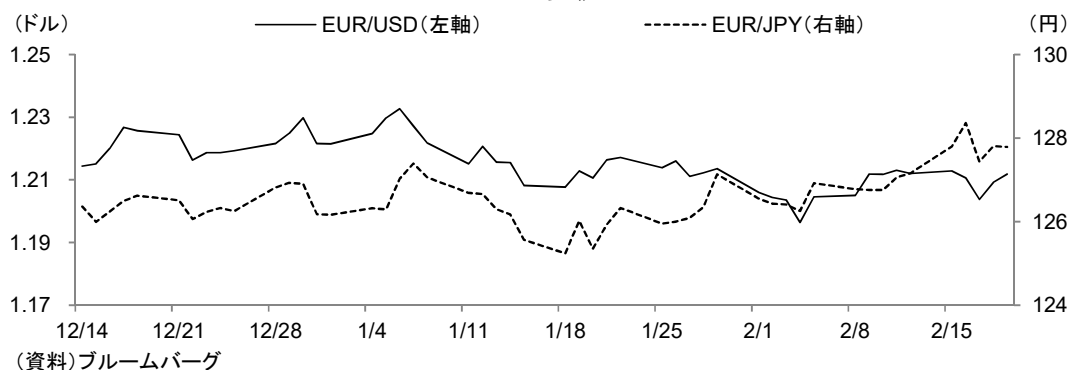
今週は、上値の重い展開を予想。先週発表されたECB政策理事会の議事要旨には、「為替変動によるインフレ見通しへの影響は過大評価されている」という内容があったが、同時に「ユーロ高による経済への影響を懸念している」といった内容もあり、引き続きユーロ高の抑制につながると考えられる。米長期金利が高水準での推移を維持しており、ドル買いが徐々に強まってきていることもユーロにとって重しになるであろう。また欧州の一部地域では依然として行動制限が実施されており、ワクチン普及による効果の実証とともに、行動制限緩和や解除による経済回復の見通しが明らかにならない限り、経済の落ち込みが深刻であったユーロへ資金が集中することは想定しづらく、上値が重い展開が続くと思われる。来週の主な経済指標として、23日(火)にユーロ圏CPI確報、24日(水)に独GDP確報、25日(木)にユーロ圏景況感/消費者信頼感指数確報が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/15~2/19)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2024 高値 1.2169 終値 1.2118

(対円) 安値 126.75 高値 128.45 終値 127.77



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3850 ~ 1.4150 147.00 ~ 150.50 円

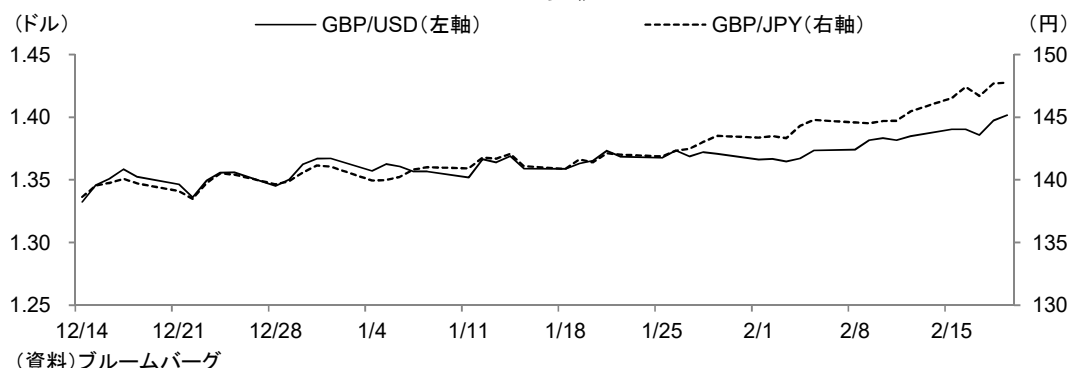
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、小幅ながら上昇。対ドル、対円では小緩む局面も見られたが、対ユーロではほぼ一貫したじり高推移を続けた。ポンド上昇の要因は明瞭ではなかったものの、敢えて挙げるなら、英中銀による追加利下げの可能性後退が、引き続き、ポンド買いの口実になった可能性は考えられた。17日の欧州時間夕方聞かれた英中銀ラムズデン副総裁の発言は、「更なる量的緩和を実施する余地がある」ものの、「見通しの中心は量的緩和の減速にある」、「マイナス金利導入の検討は継続中」だが、「マイナス金利の適切性には懸念もある」などと交錯した内容で、正直、ポンドもどう反応したものか戸惑った様子だった。対照的に、翌18日の同ソーネダース委員の発言は、「(マイナス金利導入のための)準備期間が6か月というは適切」で、「その間に(僅か0.1%)の政策金利を引き下げる余地は非常に限定的だ」と、シンプルに目先の利下げ可能性を否定。ソーネダース委員の発言を受け、英短期金利先物市場は全期限を通じて下落(金利は上昇)した。この局面のポンド上昇は、同発言が報じられるよりも数時間先行したものの、他に材料もなく、その後週引けに掛けてのポンド上昇は、同発言を材料視したものと考えられた。週央、17日に前後してポンドが対ドル、対円で小緩んだのは、同局面の米長期金利上昇を受けたドル全面高の結果と考えられた。米におけるワクチン接種進捗や大型財政出動に対する期待が、将来的な物価上昇を予見させ、「リフレ取引」などという形で、休日明け(16日)以降の米国債市場で利回り上昇を誘った。他に、英国内のニュースは、同国におけるワクチン接種の成功をほめそやすものや、英王室絡みの報が中心で、EU離脱に関する報道がほとんど聞かれなかったことも、ポンド堅調には追い風になったのではないかと。

今週の英ポンド相場は、頭打ちからの反落を警戒しながらも、今暫くの高止まりを予想。対ドル、対ユーロで節目と見られた1.40、0.87をそれぞれ上抜け、ポンドが頭打ちから調整安局面に入る可能性は高まったと考える。それでも高止まりを中心に見込む理由は、対円の150円が引き続き射程範囲にとどまっていることがひとつ。仮にポンドが、調整安局面に転じるなら(転じると限った話ではないが)、対円でも節目となる水準を突き抜け、達成感が行き渡ってからのの方がすっきりするのではないかと。もうひとつ、「リフレ取引」などと聞かれるようになって、あらためて主要国国債の利回り推移を確認してみたら、2月以降の米10年物利回りの上昇幅(+28bp)よりも、英10年物の利回り上昇幅(+38%)の方が明確に大きかった。他に、当該米債の利回り上昇幅を上回るのは、主要国ではカナダとニュージーランドぐらいで、ユーロ圏各国は押し並べて米のそれを小幅ながら下回り、日本のそれは圧倒的に小幅にとどまった。存外、足下通貨市場は、長期金利格差の伸縮に素直に反応している模様で、今後の値動きを占う上でも、長期金利動向は大きな鍵となりそう。そういう目線で見ると、足下ポンドの堅調に、英におけるワクチン接種の進捗(経済の早期正常化期待)が大きく貢献している可能性も考えられる。そういう目線で、22日に英政府が発表予定の、ロックダウンからの出口戦略も興味深い。いずれにせよ、ワクチン接種という観点で、英の相対的優位が早晩揺るぐ可能性が見込み難いことは、当面のポンド続伸を期待させる要因とも読めよう。ただし、経済の正常化は、コロナ禍による断交状態で目立たなくなっている、EU離脱による通商制限の問題を浮き彫りにしかねない要因であることにも、一定の留意はしておきたい。英経済指標は、23日(火)に英10~12月平均賃金、同失業率(ILO基準)の発表が予定される。0.10%の基準金利がゼロになるか否かなどと、重箱の隅を突くような話を材料視しているポンドでも、単月の雇用統計を殊更材料視する可能性は低いのではないかと。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/15~2/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.3830 高値 1.4036 終値 1.4001
(対円) 安値 145.33 高値 148.16 終値 147.75



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.7720 ~ 0.7920 81.80 ~ 84.00 円

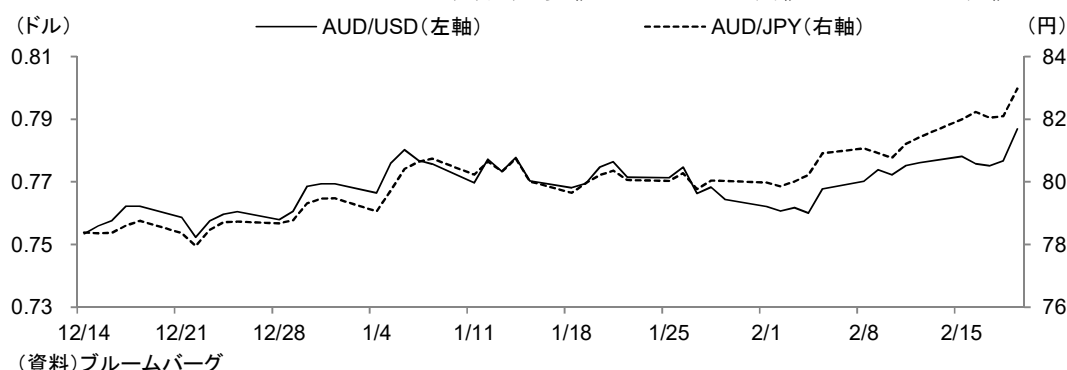
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは15日、中国、NYが休場の中、日経平均が30年ぶりに3万円台のせとなったほか、各株式市場で堅調な動きとなり、リスク選好一色。前ECB総裁のドラギ氏がイタリア首相に就任し政局不安が後退した事や、英国で1500万人に1回目の新型コロナワクチン接種を行う目標を達成したとの報道がリスクオン相場をサポートし、また豪ハント保健相が22日(月)より豪州でワクチン接種が開始されると発表した事も豪ドルを押し上げた。豪ドルは0.7790近辺まで、AUD/JPYは82円台へ上昇。16日、前日のリスクオン流れを引き継いでスタートした豪ドルは原油上昇にもサポートされ0.78台乗せ。但し株の利益確定や米10年債利回りが1.3%近辺まで上昇したことでドル買いとなり、豪ドルは0.77半ばまで戻した。RBA議事録要旨に関してはQE延長の是非について議論された他、「インフレと雇用の見通し」に基づき政策方針を決定するとあった。17日は0.77半ばで取引開始後、米金利高を受けたドル買いの流れから豪ドルは売りが優勢となり一時0.7720近辺まで下落した。米1月小売売上高は米政府による財政支援策効果を示唆するように予想を大きく上回り、更にドル高へ。豪ドルは上値を抑えられた。18日は0.77半ばからスタート。豪1月雇用統計では正規雇用の伸びが前回値を上回り、失業率も6.4%と対予想、対前回値をともに上回る改善を示し、0.77後半まで上昇。米債市場で10年債利回りがやや下落して始まった事も豪ドル上昇をサポートした。ただし上げが一巡すると今度は利益確定の売りフローで0.77半ばまで戻され、米債が1.315%近辺まで上昇したことで豪ドルは0.77前半まで下落した。原油に関してはこれまで寒波で過剰在庫が解消されるとの期待があったものの、OPEC+で4月以降増産する見通しとなったことからWTI、ブレン特等各種直近限月が下落し、こちらもやや豪ドルを抑えた。但しNY引けにかけては米株が再上昇し、0.77後半へもどした。19日豪1月小売売上高(前期比・速報値)は0.6%となり前回は上回ったものの予想を下回った。これによる特段の値動きはなく、アジア時間では0.77後半で20pips程度の値幅で小動きに推移した。海外時間では0.78後半へ大きく上昇。ワクチン配給・接種に関して各国で迅速な展開がみられる中、景気回復期待が高まった。米株では利益確定などでやや調整がみられたもののドル/円等でストップを巻き込んだドル安の動きとなり豪ドルは3年ぶりの0.78後半へ。AUD/JPYは83円台へ上伸した。この他原油や鉄鉱石価格がそれぞれ上昇した事も豪ドルを支えた。

今週は豪主要経済指標の発表は特段ないが、本日22日より開始となる豪州で新型コロナワクチン接種を受けての進展を見守りたい。尚、今後のRBA金融政策についてはRBAは第2弾のQE終了前に豪3年債の目標への対応を決定することとなるが、一部豪地場銀行は失業率の低下傾向が定着しつつあるため、今年8月にもRBAはYCCを撤廃する可能性が高いとの予想をしており、市場の注目はRBA第2弾QE開始前に既に出口戦略となっている。先週のセントRBA総裁補の講演での“RBAによる緩和政策が豪ドルに5%程度下押し圧力をかけている”との発言にも留意し、高官による緩和的政策からの出口戦略についての言及がある際には豪ドルの上値進展に注意したい。その他、24日にRBNZ理事会が開催される。9日にRBNZは過熱気味の住宅市場を抑制する為、住宅ローン融資の厳格化を発表し、またインフレ見通しに関しても引き上げたため、テーパリングの可能性について声明文に注目が集まる。AUD/NZDの調整にも注意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/15~2/19)の値動き: (対ドル) 安値 0.7725 高値 0.7877 終値 0.7868
(対円) 安値 81.41 高値 83.16 終値 82.98



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。